

島原半島に残る全国各地の文化・風俗

1638年の島原の乱後、全国からの入植者が島原半島に持ち込み、現在まで受け継がれている文化や風俗には、伝統芸能、食文化、農漁業の技術、さらには習俗に至るまで非常に豊かな多様性が見られます。

乱によって荒廃した島原半島(特に南部)には、時の藩主や幕府によって四国、近畿、九州各藩から集団での移住(入植)が推し進められました。彼らが故郷の文化をそのまま特定の集落(村)に根付かせたため、現代でもそのルーツをはっきりと確認することができます。

現在も残る代表的な文化・風俗は以下の通りです。

1. 伝統芸能・祭礼(他県の郷土芸能の定着)

最も顕著に残っているのが、集落ごとに奉納される伝統芸能です。周囲の一般的な長崎の芸能とは明らかに異なるルーツを持っています。

- 北有馬町の「浮立(ふりゅう)」・「面浮立」

南島原市北有馬町に伝わる「浮立」は、島原の乱後に佐賀藩(現在の佐賀県川副町など)から移住してきた人々によって伝えられました。子供たちが独特の衣装をまとい、大太鼓を叩いて舞う勇壮な姿は、佐賀の伝統的な「面浮立」の文化がそのまま島原の地に根付いたものです。[1, 2, 3]



- 「鳥さし(鳥刺し踊り)」**

雲仙市や島原市の一部に伝わる郷土芸能です。手ぬぐいをひょっとこのように被り、赤ふんどし姿で竹竿を操りながらユーモラスに踊るもので、これは薩摩藩(鹿児島県)からの移住者によって持ち込まれ、五穀豊穡の踊りとして定着しました。



- 「小豆島石節(いしぶし)踊り」との交流
雲仙市と香川県小豆島(土庄町)は現在も姉妹都市・友好都市として深い交流がありますが、これは乱後に小豆島から多くの農民が移住した史実に基づいています。移住者が持ち込んだ歌や踊りのリズムは、半島の民俗芸能の基盤になりました。
「小豆島石節踊り」は、かつて大坂城築城などのために花こう岩を切り出したセトウチ石の島・小豆島の石工たちが作業効率を高めるために唄った労働歌・祝い歌です。



2. 食文化のルーツ

- 「島原手延べそうめん」の技術
島原を代表する特産品である「島原そうめん」は、乱後の復興期に瀬戸内海・小豆島からの入植者がその製造技術を持ち込んだことが始まりという伝承が強く残されています。小豆島は当時からそうめんの先進地であり、島原の温暖な気候や良質な湧水、小麦の栽培に適した土地と合致したことで、一大産業へと発展しました。



3. 産業・景観(石垣と段々畑)

- 瀬戸内地方の治水・開墾技術
島原半島南部や雲仙の山肌に見られる、美しい「石垣の段々畑」や独自の貯水池(ため池)の造りには、水不足に悩まされてきた瀬戸内地方(香川・徳島など)の入植者がもたらした先進的な土木・農業技術が活かされています。彼らの開墾技術が、荒地となった島原を再び豊かな一大農業地帯へと蘇らせました。



4. 風俗・気質の二面性(「北目」と「南目」)

島原半島では、現在でも北部を「北目(きため)」、乱の被害が大きく大量の移民が入った南部を「南目(みなめ)」と呼ぶ風俗(地域区分)が残っています。

- 北目(北部): 乱の被害が比較的軽かったため、古くからの在来住民が多く、言葉も穏やかで気質も保守的とされる。
- 南目(南部): 住民の殆どが殺戮(住民浄化)され、全国から多様な移民が集まったため、開放的でバイタリティがあり、言葉や芸能がパッチワークのように多様で賑やか。
- このように、島原半島(特に南島原市や雲仙市南部)の文化は、長崎本来の文化に、佐賀・四国・薩摩・近畿などのエッセンスが融合してできた「日本全国の文化の縮図」のような独特の魅力を今に伝えています。

5 島原半島に残る全国各地の方言

島原の乱(1637～1638 年)によって島原半島の南目(みなみめ)地方の住民はほぼ全滅し、その後の復興のために幕府の主導で全国各地(特に四国、九州各藩、近畿など)から大規模な集団移民(入植)が行われました。このため、現在の島原弁(特に南島原市など)には、九州の他地域(長崎弁や佐賀弁など)とは異なる近畿や四国(旧讃岐国・阿波国など)の方言に由来する言葉やアクセントが今も点在して残っています。[\[1\]](#), [\[2\]](#), [\[3\]](#)

代表的な例として、以下のような言葉や特徴が挙げられます。

● 移住者がもたらした具体的な言葉と特徴

● すがね(蟻)

語源と思われる「スガル」は、万葉集『春されば **スガル**なす野の ほととぎす ほとほと妹に 逢はず来に けり』に引用されている古語で、東北地方では「スガル、スガレ、**スガリ**」は地蜂(クロスズメバチ)として、九州南部地域では「**スガリ**、スワイ」は蟻を表す方言として存在しています。「スガネ」はスガレ・スガリの日本語に現れる語尾変化と考えられています。

以上のことは、島原の乱で島原藩の殆どの住民が殺戮された後に、南九州薩摩地方から、多くの入植者があつたと、との思いを強くさせます。

● どんく(蛙)

司馬遼太郎「島原・天草の諸街道」では、同様な方言は越前や若狭地方にも存在している、と言及しており、島原の乱後の入植者には越前・若狭地方からもあつたのではと、更なる妄想が湧き出てきます。

● ベべんこ(牛の赤ちゃん、子牛)

主に大分県の方言として知られているようですが、香川県高松地方でも使用されている方言だそうです。島原の乱で住民空白地域となった島原半島に、西日本各地からの入植者があつた、と考えてしまう次第です。

● せっか・石花(牡蠣)

長崎県壱岐・五島地方や有明海沿岸の佐賀県の方言として知られている言葉です。

● 「はみ」(牛馬の飼料・草)

島原半島南部で使われる農業関係の言葉です。瀬戸内地方や関西圏で使われていた言葉がそのまま定着したと言われており、島原が農業地帯として復興していく過程で受け継がれと考えられています。

● 「いちくったい」(行ってきます)

南島原市などの南部で見られる独特の挨拶表現です。九州の他の地域にはない語勢の強さや独特の響きがあり、瀬戸内や近畿圏からの移住者がもたらした言葉の変化形、あるいは全国からの移民同士が言葉を通じ合わせる過程で生まれた混成表現(カタコトから派生した言葉)の代表例とされています。

● 「～な」(語尾のニュアンス)

長崎弁や一般的な九州方言では、理由や強調の語尾に「～けん」を使うのが主流です。しかし、島原半島の一部地域(特に南部や特定の集落)では、瀬戸内(小豆島弁など)に近い「～な」という柔らかな語尾の響きや、特有のアクセントが今もわずかに残っています。

● なぜ言葉が残ったのか？(歴史的背景)

島原の乱によって南部の住民はほぼ全滅し、人口が激減してしまいました。事態を重く見た幕府や新たな領主(高力忠房ら)は、次のような復興政策をとりました。

● 「移民特区」としての強制・推奨移住

全国の各藩に割り当てを決め、小豆島や四国、近畿、九州他藩から数万人規模の農民や漁民を強制・推奨移住させました。(一万石につき一家族が入植割り当てでした。)

● 集落(村)ごとの入植

移住者はバラバラに住むのではなく、「小豆島出身者の村」「天草出身者の村」のように集団で特定の地区に定住することが多かったようです。

● 「方言の島」の形成

周囲との交流が少ない漁村や孤立した集落(例:雲仙市南串山町の特定の地区など)では、移住元の瀬戸内地方などの言葉が他と混ざらずに独自の「言語の島」として長年保存されることになりました。

また、言葉だけでなく、小豆島からの移住者がもたらした段々畑の治水技術や素麺の製造技術が、現在の特

産品である「島原そうめん」のルーツになったという強力な伝承(小豆島伝来説)も残されています。

島原半島は、狭いエリアでありながら「北部(言葉が穏やか)」と「南部(言葉が変化に富み、荒っぽい)」で大きく方言が異なるのが特徴ですが、これこそが 1638 年以降の激しい人の入れ替わりを証明する生きた歴史の跡だと考えられています。

(参考事例)

方言

- ①アットーシテ ニギラエント
- ②イタランゴッ スッナー
- ③イラジャ
- ④エッタ ノボシュルギラ クラスドー
- ⑤セーチ クレンネ
- ⑥コナチャ ナンバ シュットカン
- ⑦ドアロー
- ⑧ナカスドー
- ⑨ヒョット スルギラ
- ⑩モテコナサン

翻
訳

標準語

- ①熱くて 握ることができません
- ②余計なこと をするな
- ③(どうしても) 必要だよ
- ④余り 調子づく と 殴りつけるゾ
- ⑤閉めて ください
- ⑥お前は 何を するのか
- ⑦そうだろうナ かまわない
- ⑧泣かせるぞ
- ⑨あるいは、ことによると
- ⑩どにも ならない

6 島原の乱でリセットされた地域の文化的特性(飽くまで独善的妄想！?)

「島原半島南目(島原市南:深江町〜口之津・加津佐)の人気(シンキ)は荒いと言われる。」と「街道をゆく『島原・天草の諸街道』で語っていた司馬遼太郎と同類の思いが、青春期を島原半島南目で過ごし、転勤族となって日本各地で感じた文化との異質性を何となく思っていました。

① 長期的視点に立った協力的行動が苦手(猜疑心が強い、足の引っ張り合いが激しい文化)

(例) 地場産の加工食品や農産物の質を高め、特産物に育て上げようとする行政・協同組合活動が悉く失敗
素麺組合の乱立・潰し合い、みかん・メロン・苺・ブドウ・キウイフルーツ etc etc 芳醇な気候・風土にも拘らず名産品・特産品に至らない。

② 目先の利害得失に捉われ、本質的ところから身を避ける(当面の生き残り価値観が支配的)

(例) 制作期間40年間に亙る木彫マリア像(島原の乱で犠牲となった人々への祈り)の寄贈拒否
前南島原市長(現は「相川市長」)時期、ある政治活動グループ?からの「寄贈受けは、政教分離に反する」との正当な理由とも思えない主張に屈して、当時の市長は寄贈を拒否した。
因みに、木彫マリア像の制作目的には当時のローマ法王から感謝の手紙が送られてきたとのこと。

③ 本質は南国的陽気さ、ポジティブ思考(何事も悲観的に考えない「ション ナカタイ」の精神)

(例) 平成新山の火山災害に対する考え方は、行政への対応非難や自然への恨み等は、殆ど無く、あったものは(発生した事象は)あったものとして、受入れ、そこから何をすべきかに取り組む前向きの姿勢でした。